へ 5
3218

9.2.18

浪華天満宮雲石不花
謝芸村原稿模写也

宮城県図書館蔵書

目録

歌仙一巻
春興雜題　四十三首
春風馬堤曲　十八首
澱河歌　三首
老鶯兒　一首

祇園會乃とゝ〻ゝめを
不協秋風音律
蕉門ゆゑさびたるゝ
可避春興盛席
されとゝの日乃俳諧を
ゝゝゝ吾輩の人ゆ
口賢ゝなゝゝと言

安永丁酉春　初會

蒙豆を煮ゝ良好の俳諧場　夢幻
脇を何者節乃飯常　月居
半こいたゝちを殿みゝ　月渓
雛乃とのくゝ佐ゝも　自笑
さてのこ猛と新酒を試ゝ　百池
十日の月ゆ出れりゝ　鈍僧

饅頭ふめさそ乃方の白菊　田福

廊下乃軒端や夏乃こゑ　計文

目ゑ乃ゆく聖の屋を霞らん　子曳

伀の川上にくちなを入　集馬

こゝのゑに萩乃とゝ秋もちそよき　三貴

明をたゝけも傷ゑ乃声も　常川

ゑ乃ゆくゑれく大もとゝめく　来也　致卿

貢乃役　白　や　ゑ　入　二茶

谷の坊ゑもあるに香ゑ白ふ　道之

敏馬浦

里や春の物乃ゑとゝゑ　士川

夕凪や柳乃下ゑ二日月　佳則

柱木屋の蓮　翁更ゑ黄なる　計文

路科　堂ゑ乃ちやゝ霞　菊声

柳さくや陶ゆく波老ゑ業　舎員

青柳や堂ゑ乃空乃ゑ　嬰夫

畠ある屋ゝき貫たゝ梅の花　子曳

二日ばかりすぎよ今ハ遠さかる　柳女

日数隔てやせ痩梅乃花咲ん　賀瑞

一株ノ梅をこゝに植てあるに喜を述ス

ほゝ梅乃白妙みな春をつけくる　鉄僧

、

深山乃梅の月あり竹の園　月渓

蓮初の葉もるや蘭の葉ゝ乱ル　晋才

、

たゝを見ふ梅又すゝ乃香よあり　旧國

笑ふらのまゝ乃帰ぞ来ぬ　晋才

午的乃夕乱ゝけて妻の月　正白

三年拿い智乃定故　舎六

初年を河弟大後々ゝ坂　我則

淡き菜ゝ初乃をなをたる　故郷

夢ゝ乃知乃老をとをし　嬰夫

竹をめゝ乱い行畫ゝ　舎員

彩田ゝ不田後中水乃涌出て　菊尹

儒医時ゝ記ス者ゝの伝　賀瑞

うそあのいて天そう反二十年　呑柳
はまきれなる関をもうにて　呑周
餅買く猫も栖よ帰るらん　柳女
錫とまきて鋳う髻出る　延年
暁の月うくやくとあられ降　維駒
金山ちれ霊の白浪　撫風
たくくしとれをを玄壁の平四郎　東花
酒屋よ腰を掛川の宿　左崖
空ニ高く怨れる蜂の死去るく　乙総

岡辺の畠のうもれ花も　霞夫
花のれ三秀院の浪花人　れ董
都をを住うの妻　大魯

春興八

うぐいすにうれ鳥のうぐ世ぞ　道立
けうの月をうぶう蛙　白

もろもろの一里塚を寒うする　田福

病人とていふ人病をする居るや書の函　維駒

浪花

、

墨の香や此物の奥誰ゝかな　霞東

春風や縄を過ぎ偶偶ぜず、　志慶

、

あてこいたる彼岸の月居　月居

剃松ヶ陰れる柳可南　集馬

雪あるの古無く梅の花　自笑

浪花

、

寺よ病て起く梅の自己　正名

、

春雨や降ぢらの豆飯　銀獅

、

遠星にく声ふるうすとこうる　延年

但出石

、

イめて誰ゝ袖引やこの梅　乙総

くいちや声引のそす古の先、　霞夫

、

[illegible]　吾狗

[illegible]や和士の[illegible]　吾周

[illegible]　戸こ

[illegible]や菜田の傍の[illegible]　徳野

[illegible]やわらく[illegible]戸の[illegible]　文皮

[illegible]に[illegible]　無閑

黄[illegible]や[illegible]も[illegible]　管鳥

[illegible]の[illegible]　春小

、

[illegible]の月や江の南　九湖

比[illegible]西坂本の梅の花　龍卿

培し[illegible]の東や春も面　乃容

梅咲[illegible]　白砧

伊丹

、

草[illegible]山路や雑[illegible]の[illegible]　東尾

尾[illegible]の宿合[illegible]

茶賣去て酒賣来る梅の花　百池

黄昏や梅ゝを待窗ゝ人　大魯
白梅や吹ル剛ゝる朝　嵐　ル董

謝蕪邨

余一日問孝老於故園。渡濁水
過馬堤。偶逢女歸省郷者。先
後行數里。相顧語容姿婵娟
癡情可憐。因製歌曲十八首。
代女郎意。題曰春風馬堤曲

春風馬堤曲　十八首

○ゝゝ入や浪花を出ゝ長柄川
○春見や堤長ゝゝ家遠し
○堤下ル橋芳草　荊与蘇塞路
荊蘇何妬情　裂裙且傷股
○渓添ゝ點ゝ　踏石撮香芹
多謝水上石　教儂不沾裙
○一切ゝ茶ゝ世ゝ柳老ゝ事
○茶店の老婆ゝ儂を見ゝ慇懃ゝ

各美を頭し旦儂の妻衣を美ム

○店中有二客　能解江南語

酒錢擲三緡　迎我讓榻去

○古詩云ふ猫児蓄を呼蓄来らず

○呼雛籬外鶏　籬外草満地

雛飛欲越籬　籬高墮三四

○妻妙跡三又中ゝ捷径あるを疑ふ

○たゝて花咲く三ゝ五ゝを黄ゝ

三ゝハ白し記得を去年此路よりを

○悔ことる蕭公草軽ゝ氣を浥（アヒセリ）

○むうしゝ去さらにたらふ無毋乃思

遂毋乃懐袍別ゝ妻あり

○春あゝ成長しゝ浪花ゝ乱れ

梅ハ白し浪花梅を財主乃家

妻情ゝ多ひらゝ浪花風流

○郷を辞し年ゝ負くゝ春ゝ春

本式是れ未を取梅木の梅

○故て妻保し行ゝて又行く

楊柳も花を開くべき色

○矯首たゞめぐ見る故国の方黄昏

戸を倚る白髮の人才を抱き歎く

徒春又春

○君不見古人太祖の句

義入の病るやひとゝめ親の側

激河歌　三首

○春水浮梅花南流蒐合激

錦纜君勿解急瀬舟如電

○蒐水合激水　交流如一身

舟中顧同寢　長路浪花人

○見る水上の楊の影ゝ花水の

浮ゝ去ると急ガシ

春い江頭の柳の影もし影もに

沈てもゝうつると沈ゝ

老鬻児

○妻もやゝあるゝくひとゝ笑うて声

安永丁酉春正月
門人　宰鳥校
平安　書肆　擂仙堂板